

三鷹文学散歩

大河内昭爾 監修



三鷹文学散歩

大河内昭爾

監修

三鷹市立図書館 編

提供協力者

講談社

国立国会図書館

新潮社

調布市武者小路実篤記念館

築地書館

東京都立多摩図書館

栃木市図書館

日本近代文学館

文京区立鷗外記念本郷図書館

文藝春秋

毎日新聞社

松山市立子規記念博物館

読売新聞社

田中 英一郎
田村 和子
東城 ヤイ
林 忠彦
本橋 一泰
吉田 八岑
吉野 泰平

朝日新聞社
新しき村

桜楓社

大仏次郎記念館
学習研究社

霞城館（竜野市）

写真の著作権については極力調査いたしましたがお気付きの点がございましたらご連絡ください。

三鷹文学散歩

一九九〇年三月三〇日 発行

監修 大河内昭爾

編集 三鷹市立図書館
発行

〒181 東京都三鷹市上連雀八―三―三

電話〇四二二―四三―九一五一

印刷 (株) ぎょうせい

乱丁・落丁はお取り替えます。

発刊にあたって

都心まで至近距離にある三鷹市界限は、井の頭公園や玉川上水また国立天文台、野川公園など今もなお武蔵野の面影をとどめ、作家や文人たちが好んで移り住んだところです。

三鷹市では、こうしたゆかりの作家の足跡を門人や研究者、縁者の方々の協力で「広報みたか」に「わがふるさと三鷹文学散歩」と題して掲載し、そのシリーズも百回を越えました。

この「三鷹文学散歩」は明治二十二年の町村制施行により三鷹村が誕生して百周年の記念事業の一つとして、出版するものです。

本書は、昭和五十四年四月から平成元年十月までに掲載した内容に加筆補正し、新たに散歩のしおり、地図、年表等を加え編集しました。なお、散歩のしおり等の作成にあたっては、文学郷土史家山本貴夫氏の助言をいただきました。また、日本近代文学館はじめ関係者のみなさんのご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

この冊子が作家と作品の案内や三鷹の文学散歩の手引きになれば幸いです。

平成二年三月

目 次

散歩のしおり

5

玉川上水のほとりから禅林寺へ

太宰 治	菊田義孝	35
太宰の弟子たち	山本貴夫	62
山本有三	あおきはじめ	70
森 鷗外	小川武敏	92
田中英光	山本貴夫	108
瀬戸内晴美	山本貴夫	122
今 官一	山本貴夫	132
吉野左衛門	赤木ぼく	152

井の頭公園をめぐる

大仏次郎……………	宮地佐一郎	161
亀井勝一郎……………	山本貴夫	171
	宮地佐一郎	180
武者小路実篤……………	高橋亜夫	194
	武者小路辰子	199
	渡辺貫二	206
三木露風……………	板橋宗市	215
武田繁太郎……………	大河内昭爾	247
小林美代子……………	山本貴夫	256

三鷹台から牟礼へ

吉田一穂……………関川左木夫

宮 柊二……………宮 英子
301 273

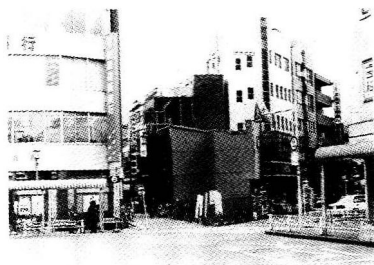
年 表
321

索 引
330

執筆者略歴
336

付・文学散歩地図

散歩のしおり



一 玉川上水のほとりから禅林寺へ

三鷹駅周辺と太宰治

三鷹駅南口の周辺から歩いてみよう。

駅前広場の西寄りにある安田信託銀行右側二つめの通りを、少し歩くと「さくら通り」にぶつかる。その交差点を渡ったすぐ右側に、ビルに囲まれて古い木造の二階建ての家が残っている。その家は「太宰治」が終戦直後の昭和二十一年十一月から、しばらく借りていた最初の仕事部屋で、太宰はここで三鷹駅前を舞台にした「メリー・クリスマス」や名作「ヴィヨンの妻」の前半を書いた。また、この家を舞台にした「朝」という作品もある。

その家の前にある不動産屋さんは、かつて材木屋さんで、太宰の弟子の「戸石泰一」が間借りしていた家である。戸石泰一はこの時の体験を「三鷹下連雀^{*1}」という作品にして残している。

さくら通りを東の方へ歩こう。

昭和二十五年ころまでは、この通りは品川上水が流れていて、道幅は現



在の半分であつた。ここには、終戦後しばらくの間、酒や食べ物を売る屋台がたくさん並んだ。太宰とともに死んだ山崎富栄が、太宰と初めて会つたのが、この屋台のひとつのうどん屋だつた。さくら通りと駅からの通りとの交差点の角には、紫ののぼりをひるがえした若松屋といううなぎ屋が屋台を出していて、太宰はここに毎日のように立ち寄り、また、編集者や友人との連絡場所に使っていた。

当時三鷹在住の親友の作家「今官」に、「斜陽」の一筋を読んで聞かせたのも、愛人の太田静子が生まれて来る太宰の子（作家太田治子）について、相談に三鷹に来たときに、太宰が指定した場所もこの若松屋である。この店は、太宰の文学アルバムにも載っている。

交差点の南側には「三木露風」の代表的な童謡「赤とんぼ」の碑がある。毎日夕方五時になると、赤トンボのメロディが、市の防災無線から流れる。さくら通りに面して、第一勧銀があるが、ここはかつての田辺精肉店で、太宰はこの離れを借りて、秘密の仕事場に「斜陽」を書いた。

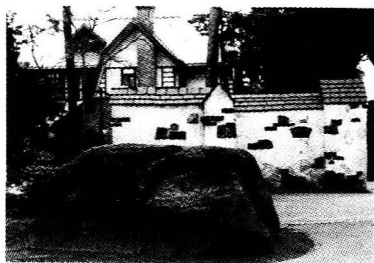
その横の狭い路地を通称太宰横丁といい、終戦当時の盛り場を象徴するような小さな飲み屋が軒を並べていたが、今はほとんど閉店してしまった。

太宰横丁を三鷹駅の方へ歩くと山の音という喫茶店がある。ここが太宰のよく通った小料理店喜久家の跡である。

路地を出ると東側に、わずかながら清流の戻った玉川上水が流れている。その上水に沿って下流へ歩こう。

玉川上水は、梅雨のころは駅前之三鷹橋のたもとのアじさいが美しく、夏は両岸の緑が眼を楽しませてくれる。この道は桜の季節も葉桜の季節も美しい。太宰が「乞食学生」の中で、「頭を挙げて見ると、玉川上水は深くゆるゆると流れて、両岸の桜は、もう葉桜になって真青に茂り合い、青い枝葉が両側から覆いかぶさり、青葉のトンネルのやうである。ひっそりとしている。ああこんな小説が書きたい。こんな作品がいいのだ」と書いた雰囲気は、ずっと下流の万助橋から玉川上水緑道あたりに良く残っている。

少し先の高木材木店の角から右に伸びる本町通り、ここをちょっと入ろう。するとすぐ、太宰が戦後ずっと愛用し、二階を仕事場としても使っていた小料理店千草の跡がある。太宰と富栄の遺体を乗せた二台の車も、この前から出ていった。今は当時の面影は全くなく、千草の跡はベル荘とい



うマンションになっている。

その斜め向かいの永塚葬儀社の二階が、富栄の下宿していた野川宅の跡で、昭和二十三年の六月十三日の深夜、二人はここを出て、玉川上水へ向かった。

ふたたび玉川上水のほとりに出て、下流へ歩くとむらさき橋があるが、その上流百メートル程のところをのぞきこむと、堰の跡が残っている。ここが太宰と富栄が入水した場所、太宰治終焉の地である。

有三青少年文庫

むらさき橋を過ぎると、まもなく「三鷹市有三青少年文庫」に着く。山本有三は、ここに昭和十一年に移り、十七年から自宅を「ミタカ少国民文庫」と名付けて、少年少女たちに蔵書を開放して自ら読書指導を行っていた。この西洋館は、二十一年十一月に、進駐軍に接収されたが、その後接収が解除されても、有三はここには戻らず、邸宅は東京都に寄贈された。都はここを「有三青少年文庫」および「東京都教育研究所・三鷹分室」として使っていた。今は三鷹市の手で一階は図書室、二階は有三の書斎や和



室が当時の面影を伝えるように復旧され、直筆の原稿なども見ることができ

る。有三はここで、代表作の一つ「路傍の石」や長岡藩の重臣小林虎三郎を偉大な教育者として世に知らしめた戯曲「米百俵」を書いた。

門の前には、有三自ら名付けた路傍の石がある。

桜桃忌と鷗外忌

有三青少年文庫から、道を少し戻って最初の角を曲がり、細い路地を南へ道なりに歩くと四つ辻へ出る。ここからは平和通りで、少し歩くと左手に「井心亭^{せいしんてい}」という木造の建物が見える。そのすぐ前の細い路地の突き当たりが、太宰が昭和十四年から死去するまで住んでいた家の跡だが、今は何も残っていない。

太宰の「おさん」という自分の死を予告したような作品の冒頭に、この家の庭にあった「さるすべり」が登場するが、そのさるすべりは井心亭の庭に移され、美しい花を咲かせて、太宰の人と文学を偲ばせる。

この付近には、両側を生垣で囲まれ、「良いところがある」と太宰に連

れられて歩いた弟子の堤重久が「コロの絵のようだ」と感嘆した面影をわずかな距離だが残す小道がある。

ここから「森鷗外」と「太宰治」の墓のある禅林寺まで徒歩十数分。平和通りを南に進み、仲町通り、むらさき橋通りを経て連雀通りを行くのが一番の近道である。

禅林寺の山門をくぐってすぐ右に、昭和四十四年に建てられた森鷗外の一歩最後の遺言を刻んだ「遺言碑」が建っている。

「死ハ一切ヲ打ち切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス。余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス（中略）墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可カラス（中略）何人ノ容喙ヲモ許サス」という碑文からは、森鷗外の死に臨んでの厳しい姿勢が浮かんできく。

鷗外と太宰の墓所は、庫裏の北側にある。墓所へ通じる小さな地下道をくぐりぬけると、明暦三年の振袖火事で神田連雀町から三鷹へ移り住んできた人々が、火事で死んだ人々を悼み、望郷の念を込めた振袖火事供養塔がある。

森家の墓所は、中央にひととき大きく「森林太郎」と遺言通り、中村不



折によって書かれた鷗外の墓、夫人で作家の「森志け子（志げ）」、父「森静男」など一族の墓がある。

鷗外の斜め前に太宰の墓がある。鷗外は遺言通り本名だけ、太宰は筆名だけで本名の津島修治は墓碑にない。鷗外に私淑していた太宰だが、墓の文字は対照的である。

太宰は鷗外を尊敬してやまず、「たち寄らば、大樹の陰、たとえば鷗外、森林太郎」「虚構の彷徨」と書き、「この寺の裏には、森鷗外の墓がある。どういうわけで、鷗外の墓がこんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、ここの墓地は清潔で、鷗外の文章の片影がある。私の汚い骨も、こんな小綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかも知れないと、ひそかに甘い空想をした日も無いではなかったが、今はもう、気持ちちが畏縮してしまって、そんな空想など雲散無消した」「花吹雪」とも書いた。太宰の死後、美知子夫人が夫の気持を酌んで、太宰をこの寺の鷗外の側に葬ったのである。

なお森家の墓所は、もともと向島の弘福寺にあったが、関東大震災後の区画整理で、寺が手狭になったので、いくつかの候補地が検討された結果、